

ヨーロッパ合衆国をめぐる論争について

鶴 嶋 雪 嶺

EECの形成と発展は、それ自身が帝国主義研究に新しい課題を投げかけるものであるばかりでなく、そのユーラフリカ計画は、植民地政策が戦前のものから大きく変貌したことを示すものである。ジョン・ストレイチイのよ⁽¹⁾うに「現代資本主義」がかつてのいまわしい資本主義とは異質のものになり、われわれが「帝国主義の終末」⁽²⁾の時代に生きていると宣言するものが現れるのもむしろ当然であろう。

いうまでもなく、現代資本主義が資本主義であることには変りはないが、もはや植民地にたいする収奪が不可能ないし不必要になり、帝国主義が過去のものになってしまったという主張は、これまでの帝国主義の通説、とくにレーニンの帝国主義観と真向から対立する⁽³⁾。したがって、ストレイチイが自らの所説を立証するためにレーニン・テーゼにたいする批判から出発したのはこれまた当然のプロセスといえよう⁽⁴⁾。現代資本主義が過去の資本主義とは異って「平和共存」や「社会主義への平和的移行」が可能であると唱きながら自説とレーニン・テーゼとを対置させようとし⁽⁵⁾ないのは、必要な研究プロセスを抜きにした空虚なアジテーションといわなければなるまい。

われわれは、第二次大戦を間にした植民地の変貌にも、植民地、後進国にたいする先進資本主義国の政策に生じた大きな変化にも目をふさぐものではない。しかし、そのいちじるしい変化にもかかわらず、エンクルマ・ガーナ

大統領が「一方でアフリカ人民に独立をあたえながら、他方の手でそれを帳消しにするやり方」と呼び、セク・トゥール・ギニア大統領が「リモートコントロールで誘導された独立、あたえられた独立」と指摘したような現実が旧植民地の大部分に存在することは否定できない。単純に「帝国主義の終末」を謳歌することはできないのである。

このように考えてくるとき、ユーラフリカ計画や複数の先進資本主義国が協同で植民地・後進国の經濟開發にあたるようになった戦後の植民地・後進国にたいする先進資本主義の政策——ネオ・コロニアリズムと総称される政策の体系的な理解がまったく厄介なものであることをあらためて痛感させられる。しかし、その理解のためには、やはり、まずユーラフリカ計画などを生みだす基礎たるEECをどのように理解するかから出發しなければならぬであろう。いまや經濟的統合から政治的統合までが課題になっているといわれるEECの現実にたいして、これまでの帝国主義研究がどこまで有効でありうるのかが、まず問われなければならないと思われるのである。

統一ヨーロッパの思想を最初に具体的なスローガンで示したのは、マルクス主義陣営においては、第一次大戦の勃発を前にして帝国主義論争をはなばなく展開した時においてであった。⁽⁵⁾そして、このヨーロッパ合衆国のスローガンをめぐる論争は、なによりもまず帝国主義理解をめぐる論争として展開されたものであった。この論争を、まずこのスローガンが提起されたただちに撤回された一九一四―五年の時期についてはその中心であったレーニンについて、つぎに、このスローガンが再び提起されやがて無視される一九二三年以後についてはその提起者たるトロツキーに焦点を置いてみてゆきたい。

ヨーロッパ合衆国のスローガンが初めて公然と掲げられたのは、第一次大戦にたいするロシア社会民主労働党（ボルシェヴィク）の態度を明らかにした宣言⁽⁶⁾においてであると思われる。この宣言は、レーニンが書いたもので、

『ゾツイアル・デモクラート』第三号（一九一四年一月一日）に掲載された。

第一次大戦の勃発は、第二インタナシヨナルとこれに結集した各国の社会主義政党に大きな動揺をもたらした。戦争開始の直前、一九一二年のバーゼル大会においては戦争の準備が進められていることにたいして警告し、この戦争の帝国主義的な性格をはっきりと指摘していたにもかかわらず、第二インタナシヨナルの指導者の大多数は、戦争が開始されると、戦費に賛成投票し、排外主義的（愛国主義的）スローガンに賛成し、戦争を正当化し、擁護するようになった。第二インタナシヨナルの最も強力な政党であったドイツ社会民主党においても、極左派に属したP・レーンシュや中間派とみられたH・クローノーなどが転向して右派に加盟し、「社会＝帝国主義者」として活躍するようになった。フランスにおいてもジュール・ゲードの入閣など、祖国防衛のために闘う者が続出した。ロシアにおいても、社会革命党と社会民主党（メンシェヴィク）は、祖国擁護の立場をとった。このような中であって、バーゼル大会の精神にのっとりて帝国主義戦争反対の立場を明らかにしたボルシェヴィクの宣言において、ヨーロッパ合衆国のスローガンは、排外主義と愛国主義にたいするアンチ・テーゼとして提起されたのであった。

宣言は、帝国主義戦争にたいして、それがどの帝国主義グループの勝利に帰そうと社会主義にとってあまり関りのないことであるという原則的な立場を鮮明にしている。

「現在の事情のもとでは、国際的プロレタリアートの見地からみて、交戦諸国民の二つのグループのうちどちらの側の敗北が、社会主義にとって、より小さな不幸であろうかをきめることはできない。しかしわれわれロシアの社会民主主義者にとっては、ロシアの労働者階級とロシアのすべての民族の勤労大衆の見地からすれば、もっとも小さな不幸が、ツァーリの君主国の敗北、すなわち、ヨーロッパとアジアのきわめて多くの民族ときわめて

多くの住民大衆とを抑圧している、もっとも反動的で野蛮な政府の敗北であろうということは、なんの疑いもありません。⁽⁷⁾」

単に帝國主義戦争にたいする一般的な原則をうたい上げているだけではなく、ロシア社会主義者にとってはもっとも反動的で野蛮なツァーリの君主国の敗北にこそむしろ歓迎すべきことであると説明してはばからないこの宣言は、社会排外主義にたいしてその対極に立つものであろう。ヨーロッパ合衆国のスローガンは、この言葉に続いて提起されている。ロシア社会主義のツァーにたいする立場を明らかにしたのに続いて、戦争に狂奔する帝國主義諸勢力に対立するスローガンとしてヨーロッパ合衆国がもち出されている。

「ヨーロッパの社会民主主義者のごく近い将来の政治的スローガンは、共和制的ヨーロッパ合衆国の創設でなければならぬ。そのさい、プロレタリアートを排外主義の一般の潮流のなかにひき入れるためならば、んでも『約束する』用意のあるブルジョアジーとはちがって、社会民主主義者は、ドイツ、オーストリアおよびロシアの君主制の革命的な打倒なしには、このスローガンはまったくのごまかしで意味がないということを説明するであろう。⁽⁸⁾」

このように、帝國主義戦争と社会排外主義にたいするアンチ・テーゼとして提起されたヨーロッパ合衆国のスローガンは、しかしながら、そのあまりにも短い文面では、その重要で幾多の論争を経なければならない問題を説明するには不充分であった。宣言は、ヨーロッパ合衆国のスローガンがドイツなどの君主制の革命的打倒と結びつかなければならぬといっている。そして、とくに革命的打倒とことわっているのは、この君主制の打倒にプロレタリアートが積極的役割を果さなければならぬことを表現したものであろう。しかし、この君主制打倒の後に君主

制に代って樹立される体制がどのようなものであるかについては必ずしも明瞭ではない。宣言では、ロシアにおける民主主義的改革の徹底と、ヨーロッパの先進国における社会主義革命とが並べられているにすぎない。

「ロシアでは、この国がきわめておくれた国で、まだブルジョア革命を完遂していないということのために、社会民主主義者の任務は、いままでどおり、徹底的な民主主義的改革の三つの基本的条件でなければならぬ。すなわち、民主主義的共和国（すべての民族の完全な平等と自決のもとでの）、地主の土地の没収、および八時間労働日でなければならぬ。しかし、すべての先進国では、この戦争は、社会主義革命のスローガンを日程にのぼせている。」⁽⁹⁾

ヨーロッパ合衆国がどのような体制と結びつくのか、三つの君主制の打倒がどのような勢力によっていかなるプロセスを経て行なわれなければならないのか。この非常に重要な問題について必ずしも明快な説明がなされていないことは、このスローガンを迫力に欠けたものに止まらただけではなかった。ヨーロッパ合衆国のスローガンの経済的側面が明らかにされなければならないところから、やがてこのスローガンが撤回されることにもなるのである。まず、『ゾツィアル・デモクラート』第四〇号は、一九一五年二月から三月にかけてスイスのベルンで開かれたボルシェヴィキの在外支部協議会がこのスローガンを「同紙上でその経済的側面が審議されるまで、それとしておくことに決定した」ことを報じた。⁽¹⁰⁾そして、第四四号にはレーニンの「ヨーロッパ合衆国のスローガンについて」がのせられ、このスローガンは撤回されることになった。ひとたび掲げられたヨーロッパ合衆国のスローガンが、わずか一年足らずで撤回された理由は何か。レーニンは、次のようにのべている。

「ロシアを先頭とするヨーロッパの三つのもっとも反動的な君主国の革命的打倒ということと関連して提起された

共和制的ヨーロッパ合衆国のスローガンは、政治的スローガンとしてはまったく非難の余地のないものであるとしても、なおこのほかに、このスローガンの経済的内容と意義というきわめて重要な問題がのこっている。帝國主義の経済的諸条件、すなわち、植民地をもつ『先進的』かつ『文明的』な強国による資本輸出と世界分割という見地からすれば、ヨーロッパ合衆国は、資本主義のもとでは、不可能であるか、あるいは反動的である。⁽¹²⁾」

すなわち、レーニンは、資本主義のもとにおいてヨーロッパ合衆国の実現が不可能であり、たとえ一時的なものとして出現してもきわめて反動的な性格なものになると考えて、このヨーロッパ合衆国のスローガンを撤回したものである。

資本主義のもとにおいてヨーロッパ合衆国の実現不可能という考えは、やがてレーニンの帝國主義論の重要な内容をなすものである。レーニンは、帝國主義国にとって、商品市場としてのみでなく資本市場としても重要な植民地は不可欠のものであると考えている。そして、世界は、広大な植民地をもつ幾つかの帝國主義国に分割されてしまった。資本主義の独占段階すなわち帝國主義の時代には、このような帝國主義世界体制以外の資本主義的世界体制は不可能である。このような帝國主義世界体制のもとにおいて、幾つかの帝國主義国に分割されている世界のその分割の割合を決定するものは何であるか。生産手段の私的所有と生産の無政府性の支配する資本主義において、資本の「力以外には、どのような分割の基礎も、原則もありえない」とレーニンは説いてゆく。ところが、力は経済的發展につれて変化する。「一八七一年以後、ドイツはイギリスやフランスより三―四倍も急速に強大となり、日本はロシアより十倍も急速に強大となった。⁽¹³⁾」そこで、この変化した資本の力にふさわしく植民地分割の比率を変えるために、帝國主義戦争が必然的なものとして生起する。

「資本主義国家の實力をテストするには、戦争以外の方法はないし、またありえない。戦争は私有財産のもろもろの基礎に矛盾するものではなく、これらの基礎の直接的な不可避的な発展である。資本主義のもとでは個々の経済部門および個々の国家の均等な経済的發展はありえない。資本主義のもとでは、産業における恐慌と政治における戦争以外には、時々刻々破壊される均衡を回復する手段はありえない。」⁽¹⁴⁾

資本主義のもとにおいて帝国主義戦争は必然的なものであって、ヨーロッパ合衆国のような帝国主義諸国の超国家的な結合は、一時的なもの以外には、不可能である。

一時的協定としてならばあるいは可能と考えられるヨーロッパ合衆国とは、では、いかなるものか。レーニンはこのようなヨーロッパ合衆国は必然的にきわめて反動的な性格をもつと次のように説明する。

「資本家のあいだの、また列強のあいだの一時的協定は可能である。この意味において、ヨーロッパ合衆国もヨーロッパ資本家の協定としては可能である……だが何についての協定か？それはただ、共同してヨーロッパにおける社会主義を鎮圧し、掠奪した植民地を日本とアメリカにたいして、共同して防衛するための協定である。この日本とアメリカは、現在の植民地分割のもとでは、はなはだしく損をしてはいるが、老年のため衰退しはじめている時代遅れの君主制的ヨーロッパにくらべて、この半世紀のあいだに急速に強大となった国である。アメリカ合衆国にくらべると、ヨーロッパは、全体として、経済的停滞を意味している。現在の経済的基礎すなわち、資本主義のもとでは、ヨーロッパ合衆国は、アメリカのより急速な発展をおさえつけるための反動組織を意味するであろう。」⁽¹⁵⁾

このように、資本主義の發展が不均等になされるために、その変化した資本力にふさわしいように世界分割をや

りなおすためには帝国主義戦争こそ必然的なのであって、ヨーロッパ合衆国の実現は不可能であり、たとえ一時的協定によって出現することがあってもきわめて反動的な性格をもったものにならないという理由からヨーロッパ合衆国のスローガンは撤回されたのである。

この「ヨーロッパ合衆国のスローガンについて」が『ゾツィアル・デモクラート』第四号に掲載されたのは、一九一五年八月である。すなわちレーニンがカウツキーの超帝国主義論批判を最も重要な課題と考え始めていた時期であった。カウツキーは、『ノイエ・ツァイト』一九一四年九月一日号に「帝国主義」⁽¹⁶⁾を書き、一九一五年四月九日号に「学び直すべき二書」⁽¹⁷⁾を書いて、その超帝国主義論を展開していた。⁽¹⁸⁾この超帝国主義論にたいしては、レーニンは第二インタナショナルの崩壊を宣言した有名な論文において次のようにのべている。⁽¹⁹⁾

「カウツキーは、革命的マルクス主義者に対立して、『超帝国主義』という新理論をもちだした。彼がこのことばのもとで考えていることは、『国民的金融資本相互のあいだの闘争』⁽²⁰⁾がおいやられて、『国際的金融資本による世界の共同搾取』⁽²¹⁾にとつてかわれる、ということである（『ノイエ・ツァイト』一九一五年四月三〇日）。しかし、彼はつけくわえている。『われわれは、資本主義のこの新しい段階が存在しうるかどうかを決定するのにじゅうぶんなだけの材料を、まだもっていない』と。こうして、『新しい段階』⁽²²⁾についてのたんなる仮定だけにとづいて、これが『存在しうる』と卒直に声明することすらあえてできずに、この『段階』の発明者は、かれ自身の革命的声明をなげすて、現在、すなわち、すでにはじまった危機の『段階』、戦争の『段階』、階級対立のいまだかつてなかったほどの尖鋭化の『段階』における、プロレタリアートの革命的任務と革命的戦術とをなげすてている！」⁽²⁰⁾

そして、この論文の発表に引き続いて執筆された『資本主義の最高の段階としての帝国主義』において超帝国主義論の全面的な批判を展開している。ヨーロッパ合衆国のスローガンの経済的側面が審議されなければならないといわれたのは、この超帝国主義論との対決がはっきりうちだされなければならないということであつたろう。それだけに、「ヨーロッパ合衆国のスローガンについて」においては、超帝国主義論批判が実に簡明にのべられている。たしかに、共和制的ヨーロッパ合衆国のスローガンは、ただそれだけでは、カウツキーの超帝国主義論との対決が必ずしも明らかではない。したがって、それが軍国主義や社会排外主義にたいするアンチ・テーゼとして、「政治的スローガンとしてはまったく非難の余地のないものであるとしても、なおこのほかに、このスローガンの経済内容と意義というきわめて重要な意義がのこっている」として撤回されなければならないのであつたのである、しかしそれならば、単に「共和制的、ヨーロッパ合衆国」としてではなく、ヨーロッパ合衆国がただ社会主義的変革と結びつてのみ可能であることをはっきりと示す「社会主義的、ヨーロッパ合衆国」のスローガンとして掲げることができなかったものであろうか。社会主義ヨーロッパ合衆国のスローガンは、ヨーロッパ合衆国のスローガンをめぐる論議の過程でトロツキーによって提唱された。トロツキーは、彼の提案が、まずカウツキーなどの超帝国主義論と無縁であることを明らかにする。

「資本主義政府間の協定によって、上から達成される多少とも完全な経済的統一などはユートピアにすぎない。この道に沿っては、事態は、部分的な妥協か、一時の糊塗策を出ないだろう。」⁽²¹⁾

すなわち、トロツキーは、レーニンとともに、カウツキーばりの超帝国主義論を一つのユートピアにすぎないとしりぞけている。しかし、トロツキーは、単に資本主義的ヨーロッパ合衆国実現の可能性を否定するだけにとど

まらず、さらに進んで、ヨーロッパ合衆国のスローガンをヨーロッパにおけるプロレタリア独裁の将来の国家形態として提起した。

「生産者と消費者の双方に対し、また文化一般の発展にとって、非常な利益をもたらすヨーロッパの経済的統一という、このことのみが、帝国主義的保護貿易主義とその道具たる軍国主義にたいする闘争におけるヨーロッパ・プロレタリアートの革命的任務となりつつある。」

「ヨーロッパ合衆国こそ、なによりもまず、ヨーロッパにおけるプロレタリア独裁の考えうる唯一の形態を表わしている。⁽²²⁾」

しかし、このようなトロツキーの社会主義ヨーロッパ合衆国のスローガンの提起は、そのままの形ではボルシェヴィクのものにならなかった。レーニンは、「ヨーロッパ合衆国はまずヨーロッパにおけるプロレタリア独裁の唯一の形態を表わす」という定式化にさえ若干の危険をみた。まだ一国におけるプロレタリア独裁の経験をもたず、当時の社会民主主義左翼においてさえこの問題について理論的明確さを欠いていたので、ヨーロッパ合衆国のスローガンがヨーロッパに革命が同時に始まらなければならないといっているかのようなままの形ではボルシェヴィクのものにならなかった。レーニンは、「ヨーロッパ合衆国はまずヨーロッパにおけるプロレタリア独裁の唯一の形態を表わす」という定式化にさえ若干の危険をみた。このレーニンの危険について、トロツキーは次のように述べている。

「一国におけるプロレタリア独裁のどんな経験もなく、当時の社会民主主義左翼においてさえこの問題についての理論的明確さを欠いていたので、ヨーロッパ合衆国のスローガンは、プロレタリア革命が少くとも全ヨーロッパ

において同時に始まらねばならないという考えをひき起したかも知れない。⁽²³⁾」

さきに見たように、ヨーロッパ合衆国のスローガンがボルシェヴィクの宣言に初めて現われたとき、宣言はロシアをはじめとする三つの君主制の打倒をうたいながらも、その後には作られる体制についてはロシアにおける民主主義的改革と他のヨーロッパの先進国の社会主義革命とを並べているだけで、このロシアにおける君主制の打倒と他の二つの君主制の打倒との間にどのような関連があるのかも必ずしも明らかにしていなかった。ロシアのみについていうならば、その社会主義革命は民主主義的改革の徹底の後にはじめて実現できるかのような指摘であった。また、革命のヴィジョンが必ずしも具体的になっていなかったたのであり、そこでヨーロッパ全土の同時革命というきわめて非現実的思考がヨーロッパ合衆国のスローガンによってひき起されはすまいかとレーニンがおそれたというのである。

もとより、トロツキーの提案自体には、そのような非現実的な同時革命の考えは片鱗もなかった。トロツキー自身次のようにのべていたのである。

「どの一国も闘争において他の国々を待たねばならないのではない。妥協的な国際的無活動が平行的な国際的活動に取って代らないように、この基本的考えを繰返すことは有益でもあり必要でもあろう。他国を待つことなく、われわれは、われわれのイニシアチブが他国における闘争への刺激をつくり出すであろうという全確信をもって、民族的土台の上に闘争を始め継続しなければならない。⁽²⁴⁾」

トロツキーの永久革命論・世界革命論に陳腐な同時革命論のレッテルをはろうとするものには、このトロツキー自身の言葉は、まさに晴天の雨であろう。たしかに、トロツキーの社会主義ヨーロッパ合衆国のスローガンは、彼

の永久革命論・世界革命論にもづくものである。しかし、その永久革命論・世界革命論は、先進国がまず革命を遂行するまで後進国は待たなければならぬというものでなく、そのヨーロッパ合衆国のスローガンはヨーロッパ全土がいっせいに革命に蜂起するというようなことをいっているのではなかった。その永久革命論・世界革命論が帝国主義世界体制のもとにおいてロシアのような後進国の革命が課題としなければならない民主主義的改革と社会主義革命との関連性——すなわちその革命の永續性を明らかにし、後進ロシアの革命と先進ヨーロッパの革命との有機的連関性を指摘したものであったように、その社会主義ヨーロッパ合衆国のスローガンは、すでに生産力の発展が国境をこえて進んだところに生じた世界戦争のもとで、軍国主義と社会排外主義にたいする最も痛烈な批判を、ヨーロッパの将来の発展にたいする体系的な展望でもってあたえるものであった。

しかし、このトロツキーの社会主義ヨーロッパ合衆国のスローガンは採択されなかった。レーニンなどが超帝国主義論批判を緊急な課題とするあまり、ヨーロッパ合衆国のスローガンのもたらす誤解をおそれたためであるが、またレーニンさえもがまだロシア革命のヴィジョンさえやがて現実に生起した十月革命とははるかにかけはなれたものとしてしかもかちえなかったためでもある。トロツキーの社会主義ヨーロッパ合衆国のスローガンが受け入れられるのは、ロシア革命をへた一九二三年においてであった。

(1) John Strachy, *The Contemporary Capitalism*

(2) J. Strachy, *The End of Empire*, 1959

(3) レーニンは帝国主義を資本主義の独占段階そのものであると規定し、その帝国主義観から、帝国主義を資本主義の政策とみなすカウツキーなどの帝国主義論を激しく批判した。このレーニンとカウツキーの帝国主義論争は、拙稿「戦前の植民地政策から戦後の後進国開発政策への変貌について」(『經濟論集』、第一一巻二号)において取り上げた。

レーニンの帝国主義観からすれば「帝国主義が過去のものになってしまった」といえるのは、ただ社会主義社会においてのみである。

- (4) J. Strachy, *The Contemporary Capitalism p. The End of Empire* p.98~109
- (5) 非マルクス主義陣営の統一ヨーロッパの思想は、最近にいたってシフスキー F. Schitovsky, *Economic Theory and European Integration* 1958 などの理論的業績となって結晶している。これについてはあらためて検討する予定である。
- (6) 「戦争とロシア社会民主党」(レーニン全集、四版二二巻二一八ページ) 邦訳『レーニン二巻選集』社会書房 第一巻6所収

(7) 同上書 邦訳二一〇二二ページ

(8) 同上書 一二二ページ

(9) 同上書 一二二ページ

(10) ロシア社会民主労働党在外支部協議会は、レーニンの主唱によって召集されたもので、第一次大戦中は全ロシア会議を召集できなかった。この会議が全党会議として機能した。会議には、パリ、チューリッヒ、ジュネーブ、ベルン、ローザンヌなどの支部から代表が集まった。この会議について、レーニンは、「ロシア社会民主労働党在外支部協議会」(レーニン全集、四版二二巻所収)を書いてゐる。

(11) レーニン「ヨーロッパ合衆国のスローガンについて」『レーニン二巻選集』第一巻六二三ページ

(12) 同上書 二四二ページ

(13) 同上書 二六二ページ

(14) 同上書 二六二二七二ページ

(15) 同上書 二七二ページ

(16) Karl Kautsky, *Imperialismus, "Neue Zeit" 32. Jahrg. Bd. II.*

(17) K. Kautsky *Zwei Schriften zum Umlernen, "Neue Zeit" 33 Jahrg. Bb. II.*

(18) カウツキーの超帝国主義論は、上記「帝国主義」及び直すスキ二書」とどもで「帝国主義戦争」*Der imperialische* ヨーロッパ合衆国をめぐる論争について(鶴嶋)

關西大學『經濟論集』第一四卷第二号

一四

Krieg, "Neue Zeit" 35 Jahrg. Bd. 1. におおつてのへられている。しかし、レーニンが批判の対象にしたのは「帝国主義」と「学び直すべき二書」の二論文であった。なおレーニンの超帝国主義論批判については拙稿参照。

- (19) 日和見主義と第二インタナショナルの崩壊』『レーニン二巻選集』第一巻6所収
- (20) 同上書 四四ページ
- (21) Leon Trotzky, "The third International after Lenin. 『レーニン死後の第三インタナショナル』現代思想社
- (22) 同上書 一一ページ
- (23) 同上書 一一ページ
- (24) 同上書 一一～一二ページ